ぴっぴだより

No.7. 2024. 9. 27

多分あれは今年に入ってからだと思うのですが、知人が直近で見て感銘を受けたNHKの番組について話してくれました。それは「夜と霧」という本についてのことでした。内容は作者である精神科医のヴィクトールフランクルが、第2次世界大戦中にナチスの強制収容所に収監された際の経験を書いたものなのですが、私自身も高校生の時に読んで、とても印象に残っている本のひとつでした。

久しぶりに聞くタイトルに、本を読んだ当時の記憶がよみがえってきました。本の内容は第2次世界大戦時の強制収容所での体験記であり、過酷という言葉では到底言い表せない悲惨な体験の数々に埋め尽くされていました。しかしその私たち人間の最も弱くて残酷な中に、人間の善なるものもエピソードとしていくつか語られていました。その中のエピソードの一つに、強制収容所で働く囚人たちが夕日見て感動をするシーンがあります。

強制労働で疲れ果てたある夕べのこと、貧相な夕食を済ませ、床にへたり込む作者に仲間が声をかけます。”疲れていようが寒かろうが外に出て見てみろ！”作者が疲れ切った体を引きずって外に出ると、そこには燃え上がるような夕日が燃えるように輝いていました。その風景を見た一人の仲間が思わず声を発するのです。

"世界はどうしてこんなに美しいのだろう…”

自由を奪われ、過酷な強制労働に毎日従事し、次々にまわりの仲間が亡くなっていく。自分自身の明日の命の行方もわからない。そんな絶望的な環境の中でも、美しいものを美しいと感じる心。それは誰にも侵されることのない”内的な体験"であり、”自由”なのです。

このエピソードは暗い背景にあってかひときわ輝き、当時の私に深く刻まれました。そして多分この”美しいものを美しいと感じる内的体験”への探求から、その後の私は色彩の世界に入っていったのだと思います。

学生時代、同じ学校の仲間にポーランドから来た大学生がいました。その友人がポーランドに里帰りをする夏休み、私も一緒についていくことになりました。その当時の私はポーランドという国自体をあまり知らず、シャガールとショパンと天動説のコペルニクスがポーランドの人だったかなぁ、くらいなものでしたが、予想を超えてポーランドでの体験はとても魅力的ものでした。特に印象的な町はクラクフで、首都のワルシャワは戦争時の空襲で建物が全滅したために、近代的な都市に生まれ変わったとのことですが、クラクフは何らかの偶然が重なって（詳しい理由は忘れてしまった…）空襲から免れ、古い建物が残っている町でした。

クラクフの町全体は一見すると灰色に覆われているイメージなのですが、灰色の扉を開けると、中はアールヌーヴォー調の調度品や色鮮やかな壁に彩られた空間や、嗜好を凝らしたユニークな内装のレストランやバーがあったり、また昼間は閑散としていた裏通りのユダヤ人街では、夜になると目を覚ましたかのように煌々と光をともす屋台が広げられ、そこでは大きな太ったおじさんが、炎の上で大きな鉄のフライパンを振るい、なんだかわからない肉を焼いていました。一見地味でつまらない表向きな姿とは違い、裏側に広がる空間は色鮮やかでユニークで活気がありました。

行く場所行く場所が新鮮で面白くてワクワクしていたのですが、ある日友人がある提案をしてくれました。30 分ほどバスで行ったところにアウシュヴィッツ強制収容所の跡地があり、今は観光

名所になっているが行きたいか？と。比較的好奇心のある私は、誘われれば大抵”yes!”と答えていたのですが、”アウシュヴィッツ”と聞いて戸惑ってしまいました。同時に、内面の色鮮やかさと活気を覆い隠しているように見える灰色の壁、昼間には姿を現さず暗い夜にだけ活発になるユダヤ人街。そしてわたしを快く迎え入れてくれた友人のおばあちゃん（おばあちゃんはおそらく 10 代の頃に第 2 次世界大戦を体験し、そのため母国語ではないドイツ語を流ちょうに話すことができました。）を思い出しながら、ああ、戦争や強制収容所はこの土地とここに住む人たちの歴史的な背景の一つなんだと今更ながらに気づき、より重みをもった存在として私に迫ってきました。

「夜と霧」の中で読んだ様々な悲惨な内容を思い出し、まさにそれが行われていた現場を体験できるチャンスだと思いながらも行くか行くまいか思い悩んだ末、当時の私は結局”Yes”と言うことはできませんでした。今となってはそれが良かったのかはわかりませんが…

そんな思い出がよみがえりながら、今またヴィクトールフランクルを読んでみようという気持ちになりました。それで手に取ったのが、フランクルの人生の回顧録。彼が生まれ育ち、精神科医となり、強制収容所に収監されて生き延びたその後の人生全体について書かれたものです。今回 30 年近くぶりに出会うフランクルさんの本の中で、当時の高校生の私が知らなかったいくつかのエピソードを知ることができました。

それは、当時精神科医として仕事をしていたフランクルさんは戦争が身近に迫っている中、ユダヤ人である自分の危機が現実味を帯びてきた際に何度も国外に亡命するチャンスがありながらそれを断り、国内にとどまり続けたこと。結果として強制収容所に送られることとなるのですが、決して強靭な肉体を持っていなかった彼が、戦力外と判断されて何度もガス室に送られそうになりながらも、想像外の偶然に偶然が重なり奇跡的に生還できたこと。その後戦争が終結し、強制収容所から解放され、生まれ故郷のウイーンに戻って間もないある日、彼の友人に会いに行き、両親、兄弟、彼の妻の死を報告して、突然泣き出し話したこと。

「こんなにたくさんのことがいっぺんに起こって、これほどの試練を受けるのには、何か意味があるはずだよね。僕には感じられるんだ。あたかも何かが僕を待っている、何かが僕に期待している、何かが僕から求めている、僕は何かのために運命づけられているとしか言いようがないんだ。」

フランクルは絶望的な淵に立たされ続けながらも、それらの出来事に悲観し嘆くだけではなく、その出来事が自分を導く意味のあることであるととらえ、そして自分が人生に何かを求めるのではなく、人生が自分に何を求めているのかを問います。

私たちはこれまでに大なり小なり様々な体験を経てきて今ここにおり、おそらくこれからもいろいろな出来事に出逢っていくのだと思います。その時にフランクルのこの問いはもしかしたら私たちへのひとつのヒントや助けになるのかもしれません。そしてそれこそが、フランクルの人生が彼に求めていたことなのかもしれません。

ちなみにもう一つ、今回初めて「夜と霧」の原題を知りました。
”trotzdem Ja zum Leben sagen”「それでも人生にイエスと言う」

今、私がもう一度フランクルの本を手に取って得たこのメッセージも、今の私に何か意味のあることなのかもしれません。

小林郁絵

森であそぼう！つくろう！みつけよう♪ 10月

こどもたちが、ポケットいっぱいにどんぐりや木の実をもち帰ってくる季節になりましたね♪

1コや2コなら飾っておいてもかわいいのですが、好きな子は袋いっぱい拾っても

まだ拾う…!?　そんなどんぐり、みなさんはどうしていますか？

捨てるに捨てられず…　でもとっておくにも…

そんな時は、その木の実たちを使って秋を感じるこんな

キャンドルたてづくりを作ってみてはいかがでしょう。

作り方はとっても簡単！

お気にいりの空きビンにキャンドルをさして

たおれないようにどんぐりや木の実

（石や棒、なんでもOK♪です）を

つめていくだけ。　秋の夜長

にキャンドルの火を眺め

ながらゆったりとした

時をすごしてみては

いかがでしょう。

：栞や恵

森に暮らすいきものたちも秋は木の実集めに大忙し!!やがてくる冬に備えてクマにリス、ネズミやカケスたちが、どんぐりとちのみ、くるみなどのエネルギー豊富な木の実を必死で集めています。その際土の中深くに埋めて隠す習性があり、そのおかげでどんぐりは発芽することができるのです。

ただし、動物たちが隠した場所を忘れてくれればですけれど…。

でも

こうして森は

つくられている

なんて、

本当に

不思議ですよね!!

土だより

みんなでお田植えした日がついきのうのような、だいぶ前のことのような…

← こんなに小さかった苗にたくさんのお米ができるって… 不思議です。
少しずつ大きくなって、茎の中で籾(もみ)の集合体である"穂"が育まれる。
8月のさいしょのころ花が咲いて、葉っぱで光合成をしてブドウ糖をつくってそれを穂に送りこんで溜め、その後全勢力を穂に集中して、とりこんだ養分もお米をつくることに最優先で注がれ、この実りの秋を迎えます。

(稲、おつかれさま! 本当にわたしたちは力を蓄えた種をいただいているんだなぁ〜)

ぴっぴの子どもたちも(大人も)、田植えから稲刈りのこの期間、まさに全集中でこの世界を生きてきたことと思います。迷いや悩みやとまどいも、嬉しいも大好きも全て糧にして、根を張り、揺れながらも、その揺れがあるからこそ柔軟に毎日をつくっていきたい。ぴっぴのみんなの日々は、本当に生きている!を感じます。

このぴっぴだよりが配布されるのは稲刈り予定の日。みんなで収穫の日を迎えているのでしょうか。

今年もお米の実りをありがとうございます! はるこ